

JFS2008から見た新入生の学習行動・価値観

○山田礼子(同志社大学)・吉田文(早稲田大学)・○森利枝(大学評価・学位授与機構)
・杉谷祐美子(青山学院大学)・○安野舞子(創価大学)・○木村拓也(長崎大学)

本研究の意義と目的

我々研究グループは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のアスティン教授が開発した大学生調査の日本版大学生調査(JCSS)を2004年から開発し、2004年、2005年、2007年と実施してきた。2005年は8大学3,961人が回答し、2007年調査では、16大学・6,512人が回答した。調査項目は、大学での経験、満足度、知識・技能の獲得状況、自己評価、価値意識等から構成されている。本研究はアメリカで蓄積されてきたカレッジ・インパクト研究の流れをベースにアスティンのI-E-O(既得-環境-成果)モデルに依拠しつつ、大学生への教育効果・成果について検討してきた。JCSS2005年度調査の分析結果からは、学年、学生の関与、教員の関与というカレッジ・インパクトがもたらす環境面での教育効果が検証された。また、学年が上昇するにつれて、学生が獲得する知は上昇し、学生が様々な大学内での環境に関与すること、それを支える教員の関与が教育効果へもたらす影響の強さが確認された。個別大学ごとに検討した場合、入学難易度とは関係なく、カレッジ・インパクトが学生への教育効果に影響を及ぼしている大学も確認されている。

高等教育がユニバーサル化するなかで、学生の変容も著しいと指摘され、従来とは異なる教育方法や教員の関わりが求められつつある。このように以前とは異なる時代環境の中で、模索される新しい大学像と教育を具現化するためにも、これまで日本の大学と学生研究では限界があるとされてきたカレッジ・インパクトモデルの再考を通じて、そのモデルの研究上での意義を再確認することが必要であるという問題意識に我々研究グループは立脚している。カレッジ・インパクトモデルを検証するためには、継続的調査に加えて、複数の時点での調査が不可欠である。2008年には新たに大学生調査のインプット部分として利用できる日本版新入生調査(JFS)を開発し、163大学・19,661人(うち新入生は19,332人)の新入生が参加した。本調査と今まで実施してきた上級生を対象とした日本版大学生調査を組み合わせることで、カレッジ・インパクトによる大学生への教育効果の測定研究の推進の可能性が見えてきている。

今年度の研究では、2008年6月から7月にかけて実施した日本版新入生調査を通じて、高校での学習状況、学習態度、進学理由等が新入生の大学での現状にいかなる影響を与えているのか、あるいは規定しているのかについて探ることを目的とする。具体的には、第一に、高校時代の学習体験・進路指導が及ぼす大学満足度・学力自己評価の影響を検討し、第二に、高校時代の学習に対する態度と大学での専攻分野との関係を検討する。更に、新入生がどのような価値観を持っているのかを、専門分野別および学生の類型別に検討する。特に後者については、日本版大学生調査を通じて、日本独自に学生類型モデルを設定することで、「ポジティブ学生」と「ネガティブ学生」の大学という環境への適応、統合、不適応、そしてそれらを規定する教育、教師、学生生活への関りの度合いについての知見が得られたが、本研究においても学生類型モデルを設定し、価値観との関係性について検討する。

本調査の概要は表1に示しているが、参加大学を設置形態別に見てみると私立大学が約75%である。性別は男子学生の比率が若干高く、高校での成績は上位から中位までが概ね70%となっている。

表1 参加大学、学生(新入生のみ)の基本的情報

設置形態	度数	比率	高校成績	度数	比率
国立	3,523	17.9	上位	3,536	18.3
公立	1,568	8.0	中位の上	5,287	27.3
私立	14,570	74.1	中位	4,583	23.7
合計	19,332	100.0	中位の下	2,753	14.3
			下位	2,556	13.2
性別	度数	比率	その他	555	2.9
男性	10,103	52.3	小計	19,274	99.7
女性	8,710	45.1	無回答	58	0.3
無回答	519	2.7	合計	19,332	100.00
小計	19,332	100.0			

高校での学習体験・進路指導から見た大学満足度・学力自己評価

JCSSが大学入学「後」に得られた大学満足度や学習行動を主題的に扱っているのに対して、JFSは大学

入学「前」に経験した進路指導状況や学習行動を主題的に扱っている。即ち、大学教育効果を問うているのがJCSSであるとすれば、JFSは高校と大学との接続妥当性(admission validity)を問うているとみなすこともできよう。そうした調査票の根底にある設計思想を手がかりに、大学入学前の各種「経験」が初年次の大学満足や学力自己評価にどういった影響をもたらしているのかを検討した。木村他(2009)では、潜在クラス分析を用いて、学生群ごとに大学教育効果をグラフ化する分析モデルを提案した。今回は、新たに、学生分類に対して更に別の質的変数でカテゴリ化したときに、単純なクロス表では見失いがちなカテゴリごとの変化や差異を可視化させる方法を提案する。

今回、学生分類に用いた変数は表2の通りである。まず、「高校成績」(3値)、「志望強度」(2値)は、JFS固有の質問項目を3値や2値に変換して作成した質的変数である。次に、「入学前親依存」「大学理解」「他律的志願」「探求学習」「積極発言」「苦勞経験」は、Q19「進学時の親の関わり」Q20「進学理由」Q22・Q24「高校時代の学習行動・経験」の質問項目を個別に因子分析した結果得られた因子の一部であり、個々にそれらの因子得点を求め、0以上を「高」、0未満を「低」と定義して、2値の質的変数に変換したものである。それらの質的変数群を用いて潜在クラス分析を行い、無目的型、探求学習型A(無理解入学)、高校指導従順型、受験勉強型A(他律型)、探求学習型B(本命入学)、受験勉強型B(自律型)の6つの学生群を得た。この学生群の帰属確率を独立変数に、Q23「能力の自己評価」Q29・34「大学満足度」を因子分析して得た各因子の因子得点を従属変数に設定して分析をおこなった。更に、学生の入学区分、設置区分や自身の大学の立ち位置を表す大学ランクを用いて、新たなカテゴリを作成し、そのカテゴリごとの差異を視覚的に比較可能にするため、X軸上の標準得点の0、即ち、平均値から縦に、当該学生群の帰属確率の平均値から横にひいた、二本の線で4つの象限を示した。例えば、第1象限にグラフが伸びていれば、当該学生群の中で、そのカテゴリに属する学生が高い値を示す確率が高いことを示している。

分析に際して、探求学習が大学入学後に与える影響は入試区分や大学ランクごとに違いがあるのでは、という仮説を立てた。学生群全体の特徴としては、学力・教養の自己評価に関しては、受験勉強型が低くて探求学習型は高いこと、授業満足に関しては、受験勉強型は無目的型よりも低く、高校指導従順型はかなり高得点において高い確率で出現することが挙げられる。探求学習型の満足度は一般的に高いのだが、特に、探求学習型Aで不満を感じる層が一定確率で出現する一方で、満足する学生も高い確率で出現する。

個別の入試区分・大学ランクごとに見てみると、学力・教養の自己評価については、探求学習型Aの国公立AO入学者で、学力・教養の自己評価が低いところに学生群(探求学習型A)の帰属確率の平均値を超えて一つの山ができて、かなり因子得点が高いところでまた再び高い帰属確率を示している(図1)。他の入学区分の学生と比べ、かなり学力・教養に自信をもっている学生層がいる一方で、国公立AO入試では、例え、探求学習を経験していたとしても、学力・教養に自信の無い層が多く入学していることがわかる。また、そのためか、探求学習型Aの国公立AO入学者は、他の入学区分の学生と比べ、授業満足度が極端に低い。

表2 高校での学習体験・進路指導を踏まえた学生分類*

		Cluster1	Cluster2	Cluster3	Cluster4	Cluster5	Cluster6
Cluster Size		.2589	.2453	.1508	.1204	.1162	.1083
学生分類		無目的型	探求学習型 A (無理解入学)	高校指導 従順型	受験勉強型 A(他律型)	探求学習型 B (本命入学)	受験勉強型 B(自律型)
高校 成績	上位	.3739	.4992	.4937	.3824	.6462	.5093
	中位	.2559	.2455	.2464	.2558	.2098	.2439
	下位	.3702	.2552	.2599	.3618	.1440	.2468
志望 強度	第一志望	.4817	.4258	.6245	.6358	.8091	.7818
	第二志望以下	.5183	.5742	.3755	.3642	.1909	.2182
入学前 親依存	高	.5242	.5319	.9415	.9200	.5497	.6149
	低	.4758	.4681	.0585	.0800	.4503	.3851
大学 理解	高	.1410	.2322	.7695	.6056	.9946	.9962
	低	.8590	.7678	.2305	.3944	.0054	.0038
他律的 志願	高	.1024	.1505	.9845	.9937	.3863	.3829
	低	.8976	.8495	.0155	.0063	.6137	.6171
探求 学習	高	.0536	.8650	.8612	.0557	.9035	.0954
	低	.9464	.1350	.1388	.9443	.0965	.9046
積極的 発言	高	.1053	.8219	.8491	.1370	.8522	.1861
	低	.8947	.1781	.1509	.8630	.1478	.8139
苦勞 経験	高	.1579	.7851	.8378	.1924	.8792	.3424
	低	.8421	.2149	.1622	.8076	.1208	.6576

*.5500を超えたものには網かけを行っている。

次に、授業満足について言えば、探求学習型Aでは、中位から下位層の大学に在籍する学生の満足が著しく低い群と高い群が分かれており(図1)、探求学習型Bでは、下位層の大学に在籍する学生の満足度が高い。つまり、高校時代に経験した探求学習の効果というものは、上位層の大学に入学した学生よりも、中位から下位層の大学に入学した学生によく現れるということが言える。

更に、高校指導従順型の授業満足度を見てみると、国公立大学に一般入試で合格した学生群で授業満足で高い値に属している学生が極端に少なくなる。例え、高校時代に探求活動の経験があったとしても、第一志望の国公立大学に一般入試で入学する際、親への依存度が高かったり、高校での進路指導の影響が強かったりするほど、他律的な志願行動であればあるほど、高い授業満足を示す確率が低くなるということは、全てが全て指示されて動く訳ではない大学での学習・研究活動に初年次から戸惑いを示し適応できていないとも推察できる。とどのつまり、中位以下の大学に入学した学生に高校時代の探求学習経験が効果をもたらすとしても、単に、探求学習を経験しているか否かというだけでなく、更に、進路選択において、自律/他律的行動であったかの別も、大学入学後の学力・教養の自己評価、及び、授業満足度に影響を与えるのであり、そうしたことが高大接続の成否の一因を担っていると言えるのかもしれない。

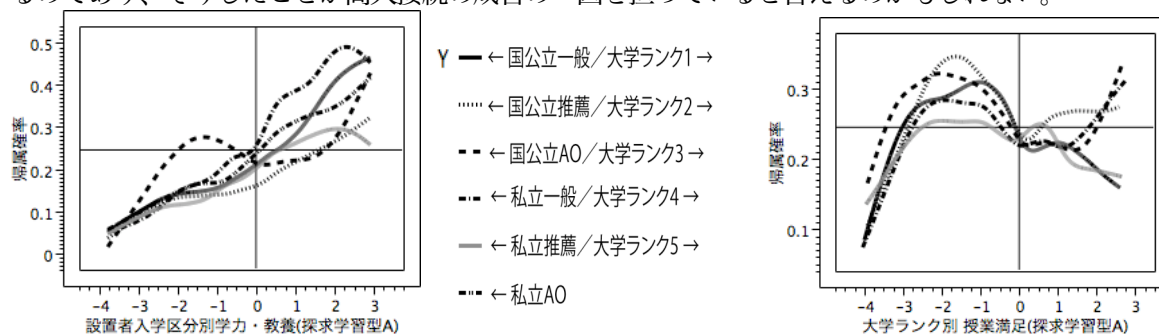


図1 学力・教養の自己評価と入学区分/授業満足と大学ランクの関係

[参考]木村拓也・西郡大・山田礼子 2009: 「高大接続情報を踏まえた大学教育効果の測定——潜在クラス分析を用いた追跡調査モデルの提案」日本高等教育学会編『高等教育研究』12号、(印刷中)。

専攻分野別高校時代の向学態度

今回の調査では、高校3年生の時点における、学習に対する全般的な態度(ここでは向学態度とする)についてもたずねている。回答のスケールは3件法で、各質問項目に関し「よくした」、「ときどきした」、「まったくしなかった」から択一で回答を求めた。表3は全回答者のうち大学1年生19,332人に限り、「授業中質問をした」、「自分の意見を論理的に主張した」、「インターネット上の情報の真偽を確認した」、「科学的研究の記事や論文を読んだ」、「授業以外に興味のあることを自分で勉強した」の各項目に関し、これらのことを「よくした」すなわち「頻繁に行った」と回答した学生の専攻分野別の分布を示したものである。

これらのうち、回答者数が28名と少ない宗教学系の学生を除けば、高校3年生時代頻繁に「授業中質問をした」群の占有率が高いのは教育学系(15.4%)と理学系(15.2%)であった。また教育学系は「自分の意見を論理的に主張した」とする学生の割合が高かった(10.2%)。「インターネット上の情報の真偽を確認した」群は情報科学系専攻の学生において比較的占有率が高く(15.9%)、反対に家政系において低かった(5.8%)。一見したところ、ここからは将来情報科学を専攻するような高校生の情報リテラシーの高さが読み取れそうではある。しかし、下表中には示していないが、同じ質問に対して「まったくしなかった」と答えた群は情報科学系(21.2%)と家政系(21.3%)にほぼ同率で出現しており、実際のところ、フレッシュマンセミナーや基礎ゼミナールなど1年次教育の機会を通じた情報リテラシー教育においては、学生の専攻分野によらず共通して基礎的な内容が求められることが推測できる。

また、頻繁に「授業以外に興味のあることを自分で勉強した」群は、他の項目に比べ全体で3,340人(17.8%)と高率で出現しているが、中でも芸術系の学生において特に高い割合を示している。これは、音楽や美術など、高等学校のカリキュラム外のレッスンや課題に取り組む機会の多かった学生が多く存在していることが影響していると考えられる。ただし、これも下表には示していないが、同じ質問に対し「まったくしなかった」と回答した大学1年生は全体で7940人(41.1%)と、「頻繁に行った」と回答した人数を大きく上回っている。専攻分野別に見ると家政系(47.4%)、経済学系(44.9%)にやや高率に出現しているが、文学系(37.1%)、理学系(36.9%)に加え前述の芸術系(23.6%)を除けばどの専攻分野においても40%を超える学生が高校3年時には授業以外に興味のあることを自分で勉強した経験が全くないと回答している。ここからもまた、大学においては入学後早い段階から、コンテンツの教育のみならず、学生の興味関

心の方向付けや、知的好奇心を刺戟するようなセミナー、資料探索の方法や本の読み方といった学び方の教育が求められることが指摘できよう。

表3 高校3年時の向学態度*

専攻分野	実数	授業中質問	意見の論理的主張	ネット上の情報の確認	科学研究論文を読む	授業以外自主勉強
文学	1,417	183(12.4%)	126(8.5%)	123(8.3%)	50(3.4%)	280(19.0%)
宗教学	28	7(25.0%)	6(21.4%)	5(17.9%)	4(14.3%)	7(25.0%)
心理学	930	78(8.4%)	58(6.2%)	88(9.5%)	39(4.2%)	192(20.6%)
法学・政治学	1,213	123(10.1%)	95(7.8%)	144(11.9%)	50(4.1%)	229(18.9%)
経済学	2,781	330(11.9%)	250(9.0%)	254(9.1%)	106(3.8%)	450(16.2%)
社会科学	1,396	161(11.5%)	115(8.2%)	125(9.0%)	63(4.5%)	234(16.8%)
理学	290	44(15.2%)	27(9.3%)	32(11.0%)	33(11.4%)	59(20.3%)
工学	1,680	181(10.8%)	117(7.0%)	160(9.5%)	107(6.4%)	31.7(18.9%)
農学	879	88(10.0%)	74(8.4%)	78(8.9%)	79(9.0%)	151(17.2%)
生物学	469	55(11.1%)	36(7.3%)	35(7.1%)	43(8.7%)	98(19.8%)
医歯薬保健	2,295	227(9.9%)	160(7.0%)	153(6.7%)	131(5.7%)	348(15.2%)
家政学	484	40(8.3%)	29(6.0%)	28(5.8%)	15(3.1%)	80(16.5%)
教育学	1,714	264(15.4%)	174(10.2%)	108(6.3%)	71(4.1%)	251(14.6%)
芸術学	777	94(12.1%)	69(8.9%)	105(13.5%)	29(3.7%)	238(30.6%)
情報科学	1,476	149(10.1%)	104(7.0%)	235(15.9%)	66(4.5%)	277(18.8%)
その他	1,024	126(12.3%)	95(9.3%)	62(6.1%)	44(4.3%)	164(16.0%)
分野無回答	452	56(12.4%)	37(8.2%)	31(6.9%)	26(5.8%)	65(14.4%)
計	19,332	2,206(11.4%)	1,572(8.1%)	1,766(9.1%)	956(4.9%)	3,440(17.8%)

*各項目「頻繁に行った」と回答した大学1年生の学生数(人)

新入生の価値観

ここでは新入生がいかなる価値観を持っているかについて概要を示す。「お金持ちになる」、「会社などで出世する」、「商売で成功する」といった“物質的価値観”に関しては、特に前者2つにおいて70%以上の学生が「ある程度重要」・「とても重要」と答えている。一方、“精神的価値観”については、「友人関係を大切にすること」を重要とする学生が93%と非常に高く、「困っている人の役に立つ」ことについても84%の学生が重要と答えており、「利己」と「利他」のバランス感覚が上手くとれている傾向がみられる。しかし、より純粋な意味で“精神的”な価値観である「宗教や精神性を生活に一体化させる」という項目については、「重要」と答えた学生はたったの15%だった。そもそも日本では、特に「オウム真理教事件」以来、宗教に対するネガティブなイメージが強く、「宗教を信じていない」人も多い（読売新聞による「日本人の宗教観調査（2008年）」より）ため、この項目の場合は「宗教」という言葉に引っ張られて数値が低くなったと思われる。現に、「精神性（スピリチュアリティ）」の定義には「人生の意味を探究する」ことが含まれている（筆者注：「精神性」は、それを扱う分野や語られるコンテキストによって定義が異なるため、定説は存在しない）が、本調査において「人生の意味を深く考える」ことについては69%の学生が「重要」と答えている。よって、この項目の場合は「宗教」という言葉のために「精神的価値観が著しく低い」という結果になっているが、現実はずしもそうではない、といえる。

それでは、専攻分野別によって学生の持つ価値観に何らかの特徴があるのだろうか。“対社会的価値観”の場合は、ほとんどの専攻において「地域社会のリーダーになる」ことと「政治的な活動に携わる」ことの割合が同程度に低い。しかし、宗教学専攻の場合、「政治的な活動に携わる」ことを重視する学生が56%おり、他専攻の学生との大きな違いを見せている。工学と情報科学専攻は同じようなパターンを示しており、どの項目においても割合が低め（50%をきる）なのが目につく。法学専攻が「最近の政治動向から目を離さない」で最も高い割合を示している（60%）のは、その専攻分野の特徴を良く表しているといえる。

“物質的価値観”と“精神的価値観”については、最も特徴的なのは宗教学専攻であり、“物質的価値観”と“精神的価値観”の割合の違いが顕著に表れている。中でも「宗教や精神性を生活に一体化」させることを重視する学生が約80%おり、その専攻の特色を如実に物語っているといえる。経済学専攻の“物質的価値観”の割合が、他の専攻と比較して最も高いことも特徴的ではないだろうか。医学専攻の場合、他のほとんどの専攻と同じく「宗教や精神性を生活に一体化」させる項目の割合が非常に低いが、「スピリチュアル・ケア」という言葉が最近よく聞かれるように、スピリチュアリティ（精神性）は医療・看護の分野で特によく語られている概念である。その分野で学ぶ学生の精神性に対する意識のあり方については、今後の検討課題ではないだろうか。生物学専攻の学生の宗教や精神性に対する意識の極端な低さにも目を引く。学生類型と価値観については当日の発表に譲りたい。

注記：本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「学生の認知的・情緒的成長を支える高等教育の国際比較研究」（研究代表者：山田礼子）の成果の一部である。